

## ○プロジェクト研究0636-1

### 研究課題 「茨城県におけるエイズ予防教育システムに関する研究 ーピアエデュケーションによる教育モデルの構築ー」

○研究代表者 看護学科助教授 黒木淳子  
○研究分担者 人間科学センター教授 落合幸子 看護学科教授 錦織正子  
(5名) 看護学科助教授 梶原祥子 人間科学センター助教授 才津芳昭  
看護学科助手 山海千保子

○研究年度 平成18年度  
(研究期間) 平成18年度～平成20年度(3年間)

#### 1. 研究目的

わが国のHIV感染者・AIDS患者数は20～30歳代を中心に増加の動向が続いている。その報告数の増加は、首都圏だけでなく地方にもみられ、各地域での対策が急務とされている。現在、茨城県内各地域の保健所や学校などでは独自に性やエイズに関する教育活動が展開されており、一部でピアカウンセリング/ピアエデュケーションの導入が始められた。しかし、ボランティアとして活動できるピアメンバーの数の確保やモチベーション維持が難しく、その有効活用が課題とされている。

そこで、本研究では、茨城県内のエイズ教育の実態とニーズを把握し、市町村や学校(中学・高等学校)との連携のもとに、県を単位とした効果的なエイズ予防教育システムを構築することを目的とした。

#### 2. 研究方法

- 1) 先行研究の分析による、研究課題の明確化
- 2) 茨城県内のエイズ教育に関する実態とニーズ調査  
対象：①茨城県内保健所(思春期保健・感染症等担当者)  
②茨城県内中学校および高等学校(保健教育担当者)  
③茨城県内の中学生・高校生・大学生
- 3) エイズピアエデュケーターの養成  
①先行研究およびニーズ調査をもとに、エイズ教育プログラムを検討する。  
②本学内でピアエデュケーターを養成する。
- 4) エイズ教育の評価方法の検討  
①保健行動モデルに関する先行研究を分析し、HIV感染予防行動に関する概念枠組みを構築する。  
② ①をもとに、エイズ教育の評価方法を検討する。

#### 3. 研究結果

1) 先行研究の分析： 全国性行動調査の結果では、若者の性行動が近年急速に変化しており、初交年齢の早期化、多数の相手と性交渉を持つ傾向、性交までのつきあい期間の短縮化などが報告されている<sup>1) 2)</sup>。一方、エイズやSTDに関する青少年の知識や意識は低下傾向にあり<sup>3) 4)</sup>、予防行動がとられていない現状が明らかになった。

同年代の若者が情報を伝達する教育方法であるピアエデュケーション、ピアカウンセリングは、90年代後半頃から、エイズやSTDの予防教育に用いられるようになった。エデュケーターが、同世代の生徒のロールモデルとなることでエイズやSTDを身近な問題としてとらえられるなど、その教育効果が多く報告されているが、有効性の検討で対照群を設定しているものは少なく、信頼性の高いデータが得られる評価デザインを検討する必要性が指摘されている<sup>5) 6) 7)</sup>。

国内で報告されているピアエデュケーションのプログラムは様々であるが、米国で行われた行動理論に基づくエイズ教育で効果が確認されたプログラムには、次の8つの共通した特徴があると報告されている<sup>8)</sup>。①ハイリスクな性行動に焦点を当てる、②コミュニケーションスキルと自己効力感の向上をめざす、③小グループ教育・

最低14時間以上の介入、④リスクを自分のものとしてとらえさせる、⑤意志決定と関連づけて伝える、⑥級友からのプレッシャーへの対処を学ぶ、⑦社会規範を強化する、⑧介入を行う教師やピアに対する十分な研修、以上である。これらから、ピアエデュケーションプログラム立案と教育評価の検討への示唆が得られた。

2) エイズ教育に関するニーズ調査：学校や地域におけるエイズ(性)教育の実態と、教育に当たる教師・保健師のエイズに関する意識およびニーズを質問紙により調査中である。エイズに関する意識調査項目は内閣府による「エイズに関する世論調査」<sup>9)</sup>を参考とし、①エイズに関する認識、②HIV感染に関する意識、③エイズ対策に関する意識、④エイズ対策に関する国や県への要望、で構成した。調査用紙は、茨城県内の中学・高校(養護学校、定時制等を含む、407校)、および保健所(12カ所)・市町村保健センター(88カ所)に郵送にて配布し、各学校・施設の保健教育担当者に回答を依頼した。今後、調査用紙の返却を待って分析を行う。

3) エイズピアエデュケーターの養成：平成18年11月に本学学生を対象に、ピアエデュケーションの説明会を開催し、ボランティアを募った。現在、ピアエデュケーター候補生として18名の学生の登録がある。また、平成19年3月2日から2日間、茨城県保健予防課主催のピアカウンセラー養成研修を本学で実施し、本学学生27名を含む55名の参加が得られた。

4) エイズ教育の評価方法の検討：健康行動理論を基盤とし、ピアエデュケーションによる教育の評価指標および評価方法を検討した。基礎データ収集を目的とした生徒対象の質問紙調査を計画し、次年度の実施に向けて具体的な調査内容を検討中である。

#### 4. 考察(結論)

国内外で実施されているピアエデュケーションはエイズ・STDの予防教育への効果が期待できる。しかし、教育効果を高めるためには、同年代のピアからの教育という方法論に頼るだけでは不十分であり、その教育内容の立案には科学的根拠に基づいた検討が必要である。また、教育の対象者は中学生から高校生と幅があり、対象学年によって性に関する知識や意識の差が大きいと考えられるため、発達段階を配慮した対応が必要となる。したがって教育プログラムは、柱となる教育内容の抽出とともに対象学年に応じた指導方法を含むものでなければならない。

茨城県では昨年度から喫煙・薬物・STDに関するピアカウンセラーを養成し、学校や地域での予防活動を開始した。ピアカウンセリングは、ピアエデュケーションの介入方法のひとつである。今後、本学と県との協力体制を作ることで、ネットワークを共有した予防活動が展開できると考える。

次年度は、エイズ予防教育のネットワーク作りを目指して県や市町村との関係性を深めるとともに、今年度の調査結果を分析し、地域ニーズに対応した教育プログラムの提案と実践・評価を行う。

#### 5. 成果の発表(学会・論文等、予定を含む)

未定

#### 6. 参考文献

1. 木原正博、木原雅子他：日本人のHIV/AIDS関連知識、性行動、性意識についての全国調査；教育アンケート年鑑下2000、創育社、東京、2000。
2. 平成11年度厚生省HIV感染症の疫学研究班報告書、2000。
3. 松本明生、鈴木絢子、大河内浩人：大学生のエイズに関する知識と態度との関連 1994年と2002年の比較調査から；保健の科学47(1)、71-77、2005。
4. 河野美香：青少年の性感染症に対する意識；四国医学雑誌57(6)、175-180、2001。
5. 宇野暢恵、荒木田美香子、戸川僚子：中学生を対象としたピアエデュケーションによる性教育の有効性の検討- 9ヶ月後までの追跡調査-、思春期学23(3)、318-327、2005。
6. 大家さとみ、栗原淳：性教育におけるピアエデュケーションの短期的効果- 高等学校での性教育の実践を通して-；学校保健研究48、32-45、2006。
7. 渡部基、野津有司：我が国の学校における性・エイズ教育のピアエデュケーションプログラム開発の展望- 中学生・高校生を対象としたプログラムの比較-；日本健康教育学会誌13(2)68-76、2005。
8. 木原正博、木原雅子：HIV流行のストラテジー；総合臨床、50(10)、2789-2793、2001。
9. 内閣府大臣官房政府広報室：エイズに関する世論調査：  
<http://www8.cao.go.jp/survey/h12/h12-aids/index.html>。平成12年12月調査。